



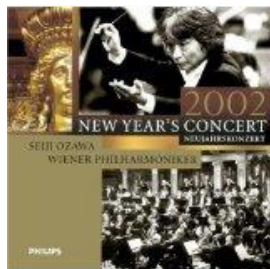
今年もよろしくお願いたします。



シュトラウス・ファミリーの功績を称えるウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートの創始者は、クレメンス・クラウス(1893-1954)。1939年の大晦日に新年の到来を祝してシュトラウス・コンサートの指揮を行った。新年の元旦にコンサートを初めて行ったのは1941年1月1日のことであり、これがニューイヤー・コンサートの正式な始まりである。2002年、日本人のアーティストがニューイヤー・コンサートの指揮者として初めて指名された。

ニューイヤー・コンサート 2002

小澤 征爾 指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団



喜歌劇〈こうもり〉序曲
悪魔の踊り
エリーゼ・ポルカ
ワルツ〈ウィーン気質〉
ラデツキ行進曲

ヤーノシュ・シュタルケル (チェロ) (1924年7月～2013年4月)

ハンガリー出身のチェリスト、音楽教育者。ハンガリーのブダペスト生まれ。幼少時より、その天才を開花させ、7歳でブダペスト音楽院に入学。11歳で初リサイタルを開く。フランチ・リスト音楽院卒業と同時に、ブダペスト国立歌劇場管弦楽団とブダペスト・フィルの首席奏者に就任。EMI や Philips などメジャー・レーベルに多くの録音を行い、コダーイやバルトーク、バッハなどの作品を得意として、不朽的な名録音を残した。

シューベルト チェロソナタ イ短調 “アルペジオーネ”

岩崎 淑 (ピアノ)

シューベルトが活躍した19世紀初頭に現れ、人気を博した楽器、アルペジオーネのために書かれた、現存する唯一の楽曲です。アルペジオーネはギターの格好をしたチェロともいえる楽器で、ギターと同じく6弦でフレットがあります。そして、チェロと同じく弓で弦を弾きます。フレットがある分、高音が出しやすいというメリットがありますが、反面ピブラートはかけ辛く、音色はヴィオラ・ダ・ガンバあるいは、ピアノカのような話もあります。楽器の奏法がノン・ピブラートからピブラート主流になっていくのに連れるかのように、アルペジオーネは人々の脳裏から忘れ去られていきました。

「アルペジオーネ・ソナタ」が出版されたのはシューベルトの死後のことで、その頃には完全にアルペジオーネが姿を消していたため、代わりにチェロやヴィオラ、フルートなどで演奏されることが通例となっています。しかし、元々6弦用に書かれ、かなりの高音域まで達するため、それをチェロで表現するのは至難の技ともいわれています。

(サウンドライブラリーより)



担当 大久保貴枝子